

あなたをプラスの人生へと導く

しなんげ

9
2018



あなたの初めは小さくあっても
あなたの終りは非常に大きくなるであろう。
(ヨブ記 8:7)

純福音東京教会・出版部

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町 2-2-19 Tel.03-3232-0067 Fax.03-3232-0729 www.fgtc.jp

Full Gospel Tokyo Church

CONTENTS

- 3 冷麺が変えた人生 イ・ヨンフン牧師
- 4 ヨンサンコラム チョー・ヨンギ牧師
・神様が建てられる家
- 6 メッセージ 志垣重政牧師
・肥沃な土地に落ちた種
- 9 信仰の明文化を成し遂げますように③⑩ イ・ヨンフン牧師
・歩みを導く方は主である
- 13 主と歩く ヘンリー・グルーバー牧師
・教会は世の光である
- 18 十字架の壇上 カン・サン牧師
・父の望み、天の父の望み
- 23 我が人生のプラス
・黙想が導いた私の人生
・試練が祝福になる
- 33 これが知りたい シン・ソンジョン牧師
・完全な什一献金の正しい理解
- 35 愛 | ユン・スンジン代表
・私に下さったタラントで仕える俳優になりたいです
- 40 かつての道、すなわち正しい道を探し求めて——
・右の強盗の福音——ソン・ヒョンギョン牧師

冷麺が変えた人生

愛する者よ。
あなたのたましいが
いつも恵まれていると同じく、
あなたがすべてのことに恵まれ、
またすこやかであるようにと、
わたしは祈っている。
(Ⅲヨハネ 1:2)

レストランはよく繁盛しました。父親の死後、母は冷麺を作り、お客様の味覚と生きがいを守る「職人」になりました。

ところが、その下で育った子は、青年になって結婚しても「伝統冷麺」を継ぐことを拒み、他の道を選びました。その後、ある時、日本旅行で3～4代にわたって味を継いでいる食堂を見て、心が変わりました。そして夫婦で母の極意を受け継ぎ、次の代の「冷麺職人」になりました。彼は放送のインタビューで言っています。「冷麺が私の人生を変えました。今冷麺は私の運命です。」

人生に変化を与えるのは冷麺だけでしょうか。私たちの人生を変えてくれるものは数多くあります。大事なものは、一時的な変化か、永久的な変化かということです。すべての人は草と同じで、その栄華は、草の花のようです。永遠なのは神の言葉であり、私たちが受けた救い、永遠の命です。

冷麺が人生を変えるのに、神の言葉、救いの恵み、聖霊の働きが私たちの人生を変えられないことがありますでしょうか。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。」(Ⅱコリント 5:17)。

イエス・キリストに出会えると人生が変わります。その時から、主が私たちの主人となり、天の御国が私たちの中に臨むのです。平凡な日常が永遠へとつながり、私たちは日々新たになります。†

神様が建てられる家



この世の中で生きているすべての人は、人生の家を建てています。ところが人々は家を建てる時、神様は何の関係もなく、人間の手段と方法と知恵と努力で建てようとします。聖書は人間がどれほど家を立派に建てたとしても、神様と一緒に建てるのでなければ、その勤労はむなしいと言われています（詩篇127:1）。

創世記にもこのような神様の御旨がよく現れています。神様はアダムとエバが美しい家を建てて幸せに生きることを願っておられて、損なうこともなく、やぶることもない、すべてが備えられたエデンの園を造られて、その園で暮らすようにされました。ところで神様は、アダムとエバに「エデンにあるどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。」と命じられました。

この御言葉はつまり、アダムとエバが建てるその家で神様の御言葉が守られて、神様の臨在を歓迎して、神様を敬うことを



チョー・ヨンギ
ヨイド純福音教会元老牧師

願っておられる、神様の摂理と御旨を表すものです。

しかしアダムとエバは彼らの家を建てる際、神様の指示を拒んで、神様の主権を意味するその善悪を知る木から取って食べて、神様から離れて自分たちで家を建てました。その結果はどうでしたか。彼らの中の愛はすぐ無くなり、互いに責任を転嫁して、恨みました。また彼らは額に汗を流して食べて生きる、生活の奴隷になっただけでなく、土から生まれて土に戻る空しい人生になってしまいました。「人間本来無一物」何も持たずに生まれ、何も持たずにこの世を去ってゆく人生、これが神様なしに一人で家を建てようとする人生の終局であると、聖書にはっきりと記されています。

ですから皆さんは今日一日を過ごす時、神様を敬い、頼って、神様と共にする一日となるようにしましょう。その時、皆さんが建てる家は神様が建てられる家となります。

神様と皆さんと一緒に建てる家は、雨風が吹き付けて、大水が押し寄せても揺れ動きません。家を建てるその勤労はむなしくなく、充実して生き甲斐のあるものとなります。

私たちが一緒に建てる、または一緒に働く時、そこには必ず対話が必要です。互いがお互いの心を知って、思いを知らなければなりません。私たちの神様は人格的な神様ですから、私たちは祈りと御言葉を通して神様の思いを知らなければなりません。†



肥沃な土地に落ちた種

—— マタイによる福音書 13 章 1～9 節 ——

その日、イエスは家を出て、海べにすわっておられた。ところが、大ぜいの群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわれ、群衆はみな岸に立っていた。イエスは譬で多くの事を語り、こう言われた、「見よ、種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種はいばらの地に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいでしまった。ほかの種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞くがよい。」

地球の資源の枯渇問題、エネルギー資源問題、温暖化問題、どれをとっても解決方法は見つかりません。しかし、環境を見て悲観する前に、神様が人類に与えてくださった無限なる精神的資源に目をとめなければなりません。それは、神様の知恵の宝庫であり、神様の考えそのものなのです。人の心が畑なら、良い種とは『御言葉』とすることができるでしょう。御言葉に無関心なのは道端であり、すぐに冷めてしまうのは岩地です。



茨の上は食欲を表します。そして、肥沃な土地、信仰に満ちている心があれば、30 倍・60 倍・100 倍の実を結ぶとあります。

第一に、考えはどこから来るのかを知りましょう。人には無限なる知恵が与えられていて、その証拠は、バベルの塔を建てようとしたことです。「民は一つで、みな同じ言葉である。彼らはすでにこの事をしはじめた。彼らがしようとする事は、もはや何事もとどめ得ないであろう」（創世記 11:6）と、神様が認めておられます。今日まで、良い考えは文明を創造し、悪い考えは文明を破壊してきました。考えは環境に支配され、交友関係にも支配されます。子どもであろうが、大人であろうが、条件は変わりません。『朱に交われば、赤くなる』のです。考えをどこに置くかが人生の成功可否を決定します。何よりも、私たちが悟らなければならないのは、考えが霊的根源から来るということです。私たちが救われたのは、聖霊様が様々な方法で考えを強要されたからです。同様に、悪魔も考えを強要します。しかし、その考えは必ず滅びに至るようになっています。考えが聖霊様から与えられたものか、悪魔からなのか、それは信仰にかかっているのです。



第二に、考えを支配し、イエス・キリストに服従させましょう。良し悪しは別として、一度植えて、根の張ったものを取り除くのは容易なことではありません。「わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく、神のためには要塞をも破壊するほどの力あるものである。わたしたちはさまざまな議論を破り、神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」(Ⅱコリント 10:4～5)とあります。良い種か悪い種かの分別をしなければなりません。

第三に、絶え間なく良い考えを植えましょう。「まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」(ガラテヤ 6:7)。紅海を前にして、人間の考えは絶対絶命であり、神様の考えは『真っ二つに割る』ことでした。創世記から黙示録に至るまで、聖書に記録された御言葉は、すべて神様の考えなのです。その考えを受け入れるために、聖書を読み、聞き、学ぶのです。御言葉と一つになるために黙想し、唇で是認し、実践しなければなりません。

今、何を蒔くべきか、植えるべきか、深く考えましょう。神様の考えは祝福にあり、悪魔の考えは『盗み、殺し、滅ぼす』ことにあります。毎日、聖書の御言葉を植えることにより、勝利から勝利、栄光から栄光へと変えられ、30倍・60倍・100倍の豊かな実を結ぶ皆さんでありますように、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。†

歩みを導く方は主である



同行の牧会を志向した

神様の摂理はまことに素晴らしい。今まで牧会をしながらじっくり考えてみると、箴言 16 章 9 節の御言葉には一点の誤りもない。「人は心に自分の道を考え計る、しかし、その歩みを導く者は主である。」牧会の道はさらにその通りだ。牧会は私自ら決定することが多ければそれほどに困難がついてくる。神様が導かれるままに従順すれば牧会は平坦なものとなる。

事実、私がヨイド純福音教会の牧師になったことは神様の一方的な恵みだ。後任者問題が論じられていた真っ只中、私は米国にいた。既に永住権を取得しておき、米国での長期牧会を準備していた。しかし、韓国の知人から電話が一本かかってきた。

「牧師様、ヨイド純福音教会の牧師の招請候補者が7名です。牧師様もその中に含まれています。牧師様が1次運営委員会投票で最多得票でした。」

私はその事実を全く知らなかった。しかし数日後再び電話が鳴った。

「牧師様、全堂会員が運営委員会で票を多く得た順序で3名の候補を立てて、2次投票を実施する予定です。心の準備をしてください。」

心の準備？ 私はその時、米国で大きな恵みの中で牧会をしていた。そして、教会も安定を求め、少しずつリバイバルしていた。韓国へ戻るということは想像もしていなかった。

2週間後、ヨイド純福音教会は後任牧師を立てて1次投票後、全堂会員950名による2次投票を実施した。そしてチョウ・ヨンギ牧師の後を継ぐ後任として2次投票でも最多得票だった私が決定となった。このすべての過程は、私が米国に滞在している間に速戦即決で進められた。韓国の教会員からひっきりなしに電話が掛かってきた。

「牧師様、おめでとうございます。」

私には「お祝い」という言葉はよく当てはまる表現ではなかった。肩に大きな十字架を担いだ心境だった。その重い負担を払うために切に祈った。

神様に全てを委ね、すべてにおいて助けを求めた。私には出来ません。しかし、神様が側にいてくださるなら、出来ます。これがまさに純福音の信仰だ。

現実の時間は変わらずに流れていった。6回もの海外への引越の経験がある妻は引越の荷造りに関してベテランだった。全てのことが一瀉千里に進んだ。私は米国の牧会をすべて整理して、

韓国へ戻った。そして、ヨイド純福音教会の第2代牧師として新しい使役を始めた。私は、「聖霊の恵み」の慰めが溢れる教会となるよう祈った。すべての人々が共に進む「同行の牧会」を切に求めた。アフリカにこのような諺がある。「急いで行きたいのか。それならば一人で行きなさい。遠くに行きたいのか。それならば一緒に行きなさい。(If you want to go fast? Go alone. If you want to go far? Go together)」

愛の無い公義は混乱だけ招来する

私は共に遠くへ行く牧会を志向した。非常に多くの陰からの攻撃と証拠の無い噂話に対しては徹底的に箝口した。牧師は戦ってはいけない。牧師は戦いに勝っても負けるのだ。戦わないことが勝つ道だ。歌手ヤン・ヒウンが1970年台に歌った「小さな池」という歌の歌詞を若干変形すると大体このような内容だ。「深い山の道のそばの小さな池にきれいなフナ二匹が住んでいた。ある澄んだ夏の日、池の中のフナ二匹が互いに戦って一匹が水の上に浮かんだ。死んだフナが腐って、水も腐ってしまった。深い山の道のそばの小さな池は、今は汚れた水だけ溜まってしまい、何も住んでいないでしょう。」

この歌詞の中には奥深い意味が隠されていた。フナは互いに池を独り占めしようと欲張った。フナは時々、蛙の攻撃を受けながらも、「連合」と「和合」を通して敵を追いだす心が少しもなかった。しかし、1匹のフナの死は池の汚染をもたらし、残りのフナまでも白濁した腹を出したまま水の上に浮かんでしまった、という内容だ。池が腐ればフナは死ぬのだ。

教会も同様だ。共に健康でなければならない。互いに戦うのなら、勝者も敗者も後遺症が残る。教会は恵みの共同体だ。律

法の刃を向けたとしたら、自由でいられる教会員が果たして何人になるだろうか。「愛」と「恵み」のない「公義」と「改革」は混乱だけを加重させる。

バランスの取れた信仰を持たせてください

2008年5月21日。ヨイド純福音教会第2代委任牧師として赴任した。様々な思いが次々と沸き起こった。私がヨイド純福音教会に通うようになったのは神様の絶対主権的な働きだった。御言葉中心の長老教会の伝統で育った4代目の私に聖霊充滿を強調する純福音が接がれバランスの取れた信仰を持つようになった。伝統はいつも神様の働きの中で形成される。それゆえ伝統を継承することは大きな意味がある。

130年の伝統のある長老教の信仰と100年伝統の五旬節信仰を共に体験し、そのような雰囲気成長したことは、並みの祝福ではない。長老教団の体系的な信仰と五旬節の熱い聖霊体験を通してどちらか一方に偏らなくなった。聖書には「過去を忘れるな」という句が良く登場する。神様はイスラエルに向けて捕虜となった痛い過去を忘れるな、と仰せられた。だからユダヤ人らは過越祭を守る。この教訓は個人の生活にもそのまま適用される。私たちは痛い過去を忘れてはいけない。最初の信仰の熱さと感激を忘れてはいけないのだ。

熱い信仰的な体験とキリストの愛を忘却してはいけない。私は牧会と連合運動をしながら、常に過去を忘れないように努力している。神の恵みを忘却しないようにと、絶えず祈ることに力を尽くしている。ひとつとなることに注力し、守ろうとしている。†



教会は 世の光である

「あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。また、あかりをつけて、それを柵の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」(マタイ 5:14～16)

ユダヤのキリスト教世界観が、この西欧文化の基本であるならば、自由民主主義の基本はプロテスタント教会の世界観である。

1215年、イギリスの聖職者たちと貴族たちが、墮落した独裁者のジョン王と闘争を開始し、王から教会の自由と国民(自由民)の権利と自由を保障する文書(マグナカルタ)に署名する

ようになった。マグナカルタ (Magna Carta) が作成される 100 年前、すでにイギリスのヘンリー王は教会の自由と国民の権利を大部分認定するという章典を発表していた。

その 100 年後、終わることのない戦争と暴政により、国家を破たんへ追い立てて国民たちを圧制するジョン王に遭って、立ち上がったのは教会の主教たちであった。主教たちはキリスト教的な世界観に適合しない独裁的で暴圧的な政治権力に対抗して、貴族たちが続いてそれに呼応した。よって権利章典は、神様の名誉と聖なる教会の栄光のため作成され、ジョン王が教会の権利を認定するという文句で始まっている。

1620 年イギリス人たちの中でイギリス政府の礼拝形態と御言葉解釈に対する干渉から抜け出ることを望む清教徒たちがメイフラワー号に乗り、新大陸であるアメリカへ向かった。彼らは新大陸に到着する前に、金持ちや貴族、王や政治家たちでない国民たちが、自らすすんで統治する自治政府制度を作ることすでに決断していた。清教徒たちはキリスト教の世界観を反映する政治システムをつくっていくことを願い、彼らは神様の法が支配する自由なたましいたちの丘の上に都市を建設することを願い、彼らの希望はアメリカ憲法として作成されるようになった。依然としてアメリカ人たちに 200 年前に作られたアメリカ憲法は最高の権威をもっている。

アメリカ人たちはアメリカの憲法に対する信頼が絶対的であるので、今もアメリカの大統領は領土や主権や国家の富でなく、アメリカの憲法を遵守するという宣誓をしている。

プロテスタントは神様が人間を神様の形通りに造り、自由意思を与え、神様が人間に救いに対しても選択する自由を与えられたことを信じる。私有財産と思考と表現の権利、法によって

のみ審判を受ける権利を重要視するアメリカ憲法は、キリスト教世界観を反映したものである。包括的なキリスト教世界観を基盤として、ひとつのキリスト教共同体が自由民主主義を発展させて、花を咲かせ、世の灯台となってくれたのである。

中国のある教授が次のような話をした。

『中国は長い間、世界で一番強力であり、富んでいた。中国はいつも強力な独裁権利を持った皇帝が、恐ろしい全体政治をしながら、国民を統治してきた。中国の皇帝たちは、国民たちから愛を受けることよりは、彼らが恐ろしい軍主となることを願った。その方が自分たちの長期執権に有利であるという事実を知っていたからである。』

西欧社会が発展させた自由民主主義は、人類歴史上、例外的な現象である。西欧以外すべての地域では、政治権力は暴圧的な全体政治を通して長期的に統治することができた。どうして西欧からそのような現象が起き上ったのか、その教授は理解できないと話した。普通常識のある人ならば、キリスト教の影響のためであるという事実が分るのだが、学者という知識のある人がそのような話をするのを聞き、中国は自由民主主義を一度もしっかりと経験したことのない巨大な国家であり、今も自由民主主義を理解することもできないだけであり、恐れているのだという印象を受けた。

中国でキリスト教が本当にリバイバルし、聖書的な世界観が中国を変化させるならば、中国を掌握している暴圧的な独裁政治制度は崩れることであろう。

包括的なキリスト教世界観を教えなければ

過ぎ去った何十年間、アメリカの高等教育制度は、進歩左派

の学者たちが弟子を養成する機関へと転落してきて、オバマ前大統領はアメリカがこれ以上キリスト教国家でないという宣布をしたこともあり、聖誕節を休日として変更させようとした。アメリカで個人の自由はしだいに消え去っていき、宗教の自由も制限され始めた。その時期に多くの人々がアメリカからキリスト教の終末を予告し、そのような現象は世俗的であり富だけを追い求める墮落したアメリカ教会に臨んだ神様の審判であると話すこともあった。

とりなしをするものでさえ、希望を失い始めた。オバマ政府はキリスト教に敵対的であった。言論界は同性結婚と性少数者問題で、教会に敵対した。アメリカ教会はただ神様のみに頼るしかなかった。謙遜に神様の前で叫ぶ残った者たちの祈りは、神様の時が来るや迅速に応えられ始めた。

イギリスとアメリカにおいて、包括的なキリスト教世界観を宣布した働き人たちがいなかったなら、イギリスとアメリカは世界的な強国になって世界宣教を担うことはできなかったことであろう。歴史は、教会が個人的な伝道と個教会の成長も大切なことであるが、国家を弟子化するため包括的な世界観を理解して説教に反映することも重要であるという事実を教えてくれた。

私は最近に応急室へかつぎ込まれたことがある。お腹が膨張して消化ができなくて、腎臓や尿路の結石だと考えられる極めて激しい苦痛で半月以上痛みを耐えた。食べることも飲むこともできなかったが、息子が呼んだ救急車に乗り、入院した。医者には30分でも遅かったら命が危なかったと話した。

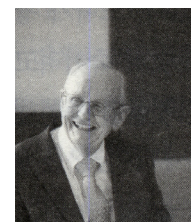
私はその医者に、死は恐ろしいものでないという事実と、私が行ったことのある天国について話してあげた。彼は、自分はイスラム教徒であり、天国について初めて聞いたと話した。私

は彼と対話をしながら神様がひとつのたましいの救いのために私を病院へ送ってくださったのだと考えるようになった。

からだ全体を調べたが、医者たちは腎臓や尿路から結石を発見できなかった。私をそれほど苦しめるようにした、その刃のように鋭いものが何だったのか医者たちは探り出すことができなかった。別に他の治療も受けなかったのに、苦痛も消え去っていった。私はイスラム教徒の医者の中の一人の魂を救うための代価ならば、その間の苦しみは十分に価値のあるものであるので、神様に感謝を捧げた。

私は伝道者であり、魂を救う時一番大きな喜びを受ける。私は聖書から一番大きな慰めと力を得る。ニュースを見ることすら楽しまない私が、どうして政治的であると誤解されることもある問題に対してやりとりするのかという理由は、プロテスタントが平安と繁栄の中で魂の救いと教会成長に集中する間、敵たちは国家を弟子化させようと教育機関、文化団体、言論界、政府機関を掌握する戦略を用いるからである。

彼らは教育を通し、国家の中の一番ソフトで軟弱な子供たち、若者たちを神様の法から離れるようにして、文化を通して国民たちの道德心を墮落させ、最終的に法を変えて国民と教会の権利と自由を奪おうとするため、私はこのような問題を教会に知らせているのである。†



ヘンリー・グルーバー (Henry Gruver) 牧師

「世界を歩くとりなし祈禱者」として知られている筆者は、18歳の時アメリカアリゾナ州フェニックスの虐犯地域で主と共に歩み始められ、今まで主と共に歩んでおられる。彼は全世界のどこでも彼が出会う人たちのために祈られ、福音を伝えておられる。彼の人生には超自然的な奇跡が多くあるが、もっと重要なことは彼が神様の御言葉に従順して歩みながら祈っておられるという事実である。

父の望み、天の父の望み



愛する私の子供たちが人生の中で苦しみに会うたびに、父の望みを覚えていて新たな力を得て立ち直るように私たちもやはり天の父の望みを覚えて希望をもって生きるなら、時には辛いことがあったとしてもわしのように羽ばたく新しい力を得られるはずです。

長女、タソ（多笑）は喜んで笑いながら生きてほしいと願ってつけた名前です。いつも優しくて温かい気持ちで人と動物を愛して、自分よりも他人を配慮して気遣う娘です。結婚したあと一番つらい時期に生まれたので、美味しいものもおなか一杯になるまで食べさせてあげられなかった後ろめたさが常に心にあったので、少し前に白い運動靴がほしいと言われて買ってあげました。

白い運動靴を買ってあげる時に心配したとおり、何日も経たないうちに白い運動靴は汚れてしまいました。そして家族の者

は忠告しました。きれいに保てないのだから、次からは白い靴はやめておきなさいと。悲しくて悔しい気持ちのままで、タソは運動靴を水につけておきました。もちろん私も同じことを言いたい気持ちでしたが、汚れた白い運動靴を漂白剤できれいに洗ってあげました。買ったばかりのようにはならなかったけれど、力強くこすったので、思ったよりはきれいになりました。私の手からは漂白剤のにおいがなかなか消えなかったけれど、きれいになった靴を見て笑っているタソの顔が私を幸せにしてくれました。

長男、ゴン（健）は自分のたましいと体を健康に維持するだけではなく、他人までも健康にさせる人になってほしいと思って「ゴン（健）」と名付けました。良く食べてよく寝て苦しみにもよく耐えて、いつも幸せに生きる息子です。ホームスクーリングを始めてからは友人も減り、時折息子が一人で公園をうろうろしているのを見てかわいそうだと思っていました。最近、野球をやりたいと言っていたので野球グローブを買ってあげました。

野球グローブを持って喜んで外にでましたが、野球をする友人の仲間に入れてもらえずにがっかりして家に帰って来る姿を見て、その日はとても疲れていて手首と腰の調子が良くなかった日でしたが、ゴンと一緒にキャッチボールをしてあげました。既に遅い時間だったので50回くらいしか投げなかったけど、父の速いボールを受けながら汗を流す gon は、より健康な自分を築いているように見えました。薄暗くなって戻ってくる時にゴンが言った“お父さん、ありがとう！”はとても心地よい響きでした。

三人目の子供で末っ子のタヨン（多然）は、自分勝手な人生を生きずにすべてのことにおいて主を認め、主に導かれるままに自然に感謝しながら生きてほしいと思ってつけた名前です。私達夫婦が40歳を過ぎて生まれた子供なので心配も多くありました。いつも父と母が優しくしてくれて姉と兄が仕えてくれるから、受けるばかりで分け与えることのできない欲張りな子どもにならないかと心配したのです。

そんなある日、毎朝乗る幼稚園のバスを運転して下さる執事さんに会いました。いつも明るい笑顔で子供たちに挨拶をしてくださる方ですが、古そうな軍手を着けて運転しているところを見たので、高くはないけれど品質の良い運転用の手袋を二つ用意しました。月曜日の朝、タヨンが挨拶をしてバスに乗る前に、私はタヨンが見ている時、手袋二つを運転して下さる執事さんに渡しながら子供達のための奉仕への感謝の気持ちを伝えました。タヨンはちらっとその場面を見ては自分が渡したかのように気分よさそうな顔をして自分の席に座りました。

神様から流れ出た愛

愛するわが子、三人のために私がやったことをこのように並べた理由は、子供達が父を認めて感謝するようにさせるためではありません。そして、後に子供達から返してもらうためでもありません。

タソの白い運動靴を洗ってあげた理由は、イエス様が弟子たちの足を洗ってあげたように、タソもこの世の汚れによって傷ついて苦しんでいる人たちを涙と祈りによって洗ってあげるような人になってほしいという望みを持ってしたことです。

自分がつらい状況でもゴンとの時間を作って一緒に遊んであ

げた理由は、失った一匹の羊を探しておられるイエス様のように、ゴンも寂しくて苦しんでいる人々のために時間を作って仕える人になってほしいという望みを持ってやったことです。タヨンが見ている前で小さなものだけど分かち合う喜びを見せた理由は、「受けるよりは与える方が、さいわいである」と言われた主のみことばのように、これからの人生で受けるばかりではなく人々に与えながら生きてほしいと望んでいるからです。

いつかは父が死んでこの世からいなくなっても、タソの靴を洗ってあげた父の優しさがタソの優しさになり、ゴンと遊んであげた父の犠牲がゴンの犠牲になり、タヨンの幼稚園バスの執事さんのための心遣いがタヨンの心遣いになることを望んでいるからです。最も大事なことは、父の優しさと犠牲と心遣いは父本人から出たのではなく、ひたすら神様から出たものであることを必ず覚えてほしいのです。頭でわかって終わるのではなくて、これからの人生すべてが、悟ったことを行動に移す人生になるように願うばかりです。

いつか子供達がこのメッセージを再び読む日が来るはずですよ。その時は、父が完全な人ではなく、切なる願いを持った人であったことを知るようになるでしょう。また、良い暮らしをすることが父の願いではなく、愛するわが子達がイエス・キリストに似た人としてこの世を生きることが、父のまことの願いであったことも知るでしょう。

この文を締めくくりながら、私は少しの間空を見上げます。無知で弱くて卑しい人間の父も、愛する自分の子供に対して望みを持っているとしたら、天の父の望みも当然お有りだと思えます。それも、より大きくて偉大な希望です。全世界を作られ



た父なる神様、その一人子をこの世に送られて十字架の死までも許された父。さらに聖霊様を送られて、私たちの中で言い表せないうめきによって祈らせて下さった父が、私たちに期待しておられる望みは一体何でしょうか？正解を一つにまとめて答えることは容易ではないですが、その望みを覚えて生きるなら私たちの人生は明らかに変わると信じています。

愛する私の子供たちが人生の中で苦しみに会うたびに、父の望みを覚えていて新たな力を得て立ち直るように、私たちもやはり天の父の望みを覚えて希望をもって生きるなら、時には辛いことがあったとしてもわしのように羽ばたく新しい力を得られるはずです。そして、その望みがつながれて、最後は天の父の望みがこの地に満ちることを切に願います。8月の残暑も我らの主の望みを覚えて勝利しましょう！†



キム・ヒョンミ
牧師・GIM 代表

黙想が導いた 私の人生



私は、裕福な家庭で末の娘として生まれた。イエスを信じなかった家庭だったが、儒教的な序列や価値観を与えてくれたことはなかった。むしろ父が米軍だったためか、家庭の中では自由に表現でき、質問形式の対話法を通じて深く考えられる習慣を持つことができた。

両親は私たちに、なにより自由をくれる人格的な人だったが、互いにはそうではなかった。人生の重圧感のためか、父は母にすべてのストレスをぶつけた。

年を取り、戦争を経験した両親の世代には健全な家庭を築くには限界があり、その傷痕によって歪曲された自我を持たざるをえないことを理解するようになった。不安定な雰囲気でも、それでも私は十分な家庭の愛の中で育った。

好奇心が多かった私は、新しいことに興味を持って挑戦することを楽しんだ。運動をしてみたり、旅行もしてみたり、かつてはコンピュータープログラムの塾に通ってみたこともある。それでも満たされないその何かが私を空虚にした。

中学校時代のことだ。友達が、自分の通う教会に来てみない

かという誘いに、私はすんなり承諾をし、教会に行った。しかし、見知らぬ雰囲気と知らない聖書の世界は、まったく何の話なのか聞き取れず、不便でどこもない状況が、教会に対する抵抗として現れ出た。しかし、私の周りには教会に通う友達がとても多かった。そのため、常に私を教会に導こうとする友達も現れた。高校に入ってやっと私は主日礼拝を捧げ始めた。

どうにか時は流れ、そうして大学を卒業して結婚をした。私の信仰の分岐点は、この時からだと言っても過言ではない。たいくつな日々を送っていた結婚以前の時間に比べて、あまりにもすることが多い新しい家族に対する衝撃は、私を疲労させて行った。そして、結婚 25 日目に、私は実家の父を天国に送った。空が崩れるような感覚だった。

友達と過ごす時間が良くて外に出ている夫と、世話をしなければならぬ子供 2 人、そして夫の家族たちの要求…私は息が詰まり、ついに倒れた。3 ヶ月間、何も食べられず点滴で命を

維持する状態だった。四方から患難を受けながら、そこから私は神様に近づき始めた。主は、誰も私を害することがないのに、世の中を恐れて人を恐れたために起きたということを祈りの中で気づかせてくれた。

結婚をしてから始まった黙想と祈り

結婚をして 1 年が過ぎ、私たちの家族は、仁川で洋服店をすることになって天幕を移した（引っ越しをした）。教会も移すことになったが、ある勧士さんが、私にいつも赤ペンを右手に握って、聖書を一日に三章ずつ読みながら感動が来るところに下線をひくことを勧めてくれた。私はその後、本当に熱心に下線をひきながら聖書を読んだ。それが黙想の始まりだった。最初は何のことも分からなかったが、そのまま読み続けた。しかし、読み続けるほどに、まるで映画を見ているように聖書の御言葉が経験となった。その御言葉により悔い改めをして、その御言葉により力を得て、希望を持つことができた。

小グループの始まり

オンヌリ教会は「筭（スン）」という区域の礼拝が行われる。家庭を中心に進められている「筭礼拝」は、夫が筭長を預かることになっているが、夫たちと一緒に教会に出席できない人たちは、昼間に集まる「筭」が行なわれた。

私は昼に集まる筭の筭長になり、数ヶ月もたたずに、20 人を超える筭になった。その間私が恵まれた御言葉を分かち合い、激励し、勧めることが多いからか、継続して筭に入りたがる人も出て来た。教会は一对一と Q T が核心的な基礎信仰を育てると考えて、すべての聖徒たちは、必須的に一对一と Q T をした。



週間に集まって一週間黙想した内容を分かち合いながら祈り、宣教する GIM の集い（左）。ドラム・パイプ・カレッジを通して開かれている祈りの学校、御言葉を握りしめて祈るによって、祈りによってイエス・キリストに似ている人々が建てられている。（右）

そのように集まり始めた人たちと共に、教会のための祈り会を計画して、私は火曜日に祈り会を導くようになった。

黙想は祈りに必ず必要な作業だと思う。多くの人たちが祈りは一生懸命するのに、イエス様の似姿へと変わって行かないのを見ながら悩に葛藤し続けた。その理由は様々だったが、その中の最も大きな部分を占めているのが、御言葉に対する理解なしに、つまりイエス様を知らないまま祈りを捧げているためだということを知った。

GIM(Group Intercessors Ministry) の始まり

2011 年牧師按手を受けて始めたのが、とりなし祈りの小グループ使役団体である GIM だ。代表になった私は、祈り学校からの講師料で宣教師を支援した。後援制度を開始すればより多くの宣教師を助けることができるという提案も出たりしたが、私は物質を管理することに特別に心を注ぎたくなかったので、今でも必要な人だけの助けと、必要なところに後援をしている。

祈りの学校は、ドラノバイブル・カレッジを通して、多くの人たちが集まって一緒にお祈りをすることができる喜びの使役となっていった。韓国は、多くの厳しい環境によって、祈りが賜物として用いられる国だ。そのためか、「祈り」というものが起伏的であり、呪術的な形のものが入り込んでいることを感じる取ることができる。黙想と個人の祈りは、神様の御言葉が中心になってこそ、聖霊の導きに敏感になることができる。私は毎朝、御言葉を黙想することで 1 日が始まり、その黙想の御言葉が祈りになってその日の御言葉で神様と一日中交わる祈りをする。このような生き方が、世の中についていくことが幸せ



ではなく、神様の御心についていくことが幸せであり、またその命の道を選択することができるようになる。

主の働きを始めてから 20 年になった。神様は私に何かをくれと言われたことがない。なぜなら全ての万物の主人だからだ。ある日、まるで神様に何かをしてあげたかのように疲れた果てた心を抱きながら眠りにつこうとした時、その眠りを破ったことがあった。主は「あなたがなくてもその働きをする人はとても多い。私があなたとこの働きをしようとしているのは、あなたと一緒に喜びを分かち合うため、あなたをこき使うことではない！」驚いた私は、その後の全ての時間を神様と喜びを分かちあっていくことに集中した。

バプテスマのヨハネのように荒野で呼ばれる者の声になり神の民を慰め、主の道を備えてシオンの大路、すなわち、主の道を平坦にするために、涙の谷にある者たちを御言葉で起こし、高ぶる者の高を削ることができる御言葉を宣言する。私は死ぬまで主の御言葉を黙想して祈る。†



アン・ジョンベ
教授・ハンセ大学
メディア映像学部

試練が祝福になる



ある日、まるで津波のように襲った突然の妻の肝移植診断と治療過程を通じて癒しの祈りと神様の働きを肌で体験した。神様が監督した我が家の映画のような2ヵ月間のストーリーを語ろうと思う。

3月末、妻が心臓・循環部分に痛みを感じ循環器専門病院で診察を受けた。診察を通して肺に異常症状が見つかった。急いで近くの総合病院に行って診断を受けた後、入院することになり、2週間、各種検査と様々な薬物で治療を受けた。しかし、むしろ黄疸（おうだん）とお腹の不調と腹痛が始まり肝臓以上の症状が急速に悪化し、4月13日、ソウルにあるアサン病院に救急車で搬送された。

搬送された当日、ソウルアサン病院で緊急検査が行われた。検査後、急性肝不全がとても深刻で、それ以上の治療はもはや無く2週間以内に肝移植をしないといけないと告げられた。その方法だけが妻を生かすことができるという衝撃的な診断が下された。医者の診断に強い衝撃を受けた。北京大学院卒業後

北京所在の中国メディアコンテンツ企業で勤務していた娘に連絡すると、自分が肝臓を提供すると言い、翌日帰国した。また、まさにその翌週に空軍入隊を控えていた息子も自分の肝臓を提供すると言い、入隊延期申請をした。

私は4月15日から私達、家族の状況について切実な思いで癒しのとりなしの祈りを頼んだ。各キリスト教関係者のかた達、ハンセ大学の教職員や教会地域グループをはじめとする信仰の家族に緊急にお祈りを要請した。娘と息子は4月16日朝から応急に行った臓器適合性1次検査を始め、検査は一日中続いた。以後、妻の症状は急速に悪化し一日でも早く手術が必要な切実な状態になった。

1、2次検査を通じて娘が相応しいという結果を得て急いで4月25日、同時に手術予定を調整した。

4月25日未明、朝5時から、緊迫した手術の準備が進められた。義理のお母さんが通っている主サラン教会の牧師様が祈りに来てくださった。妻と娘は手術室に入り、午前8時から肝臓



肝臓を提供者娘と肝臓移植者母の手術後、初対面の日（左）。
お見舞い来て娘のために祈ってくれる信仰の家族、この2ヵ月の過程を通じてとりなし祈りの威力を改めて悟った（右）。

移植手術が始まった。手術のための癒しの祈りが各地で行われ、私もソウルアサン病院にある祈祷室で、ひたすら祈り続けた。娘の手術が先に終わった。回復室で、麻酔を覚めた後、娘 ナヘが回復室に移ってきた。手術前至って健康だった娘が重体となり、腰と手術部位のひどい激痛に泣きながら呻吟し、苦しんだ。私は泣いて、祈ることしかできなかった。

妻の手術は15時間以上行われ、夜11時頃に手術が終わったという通知を受けて夜12時頃に患者を窓ガラス越しに見ることができた。人工呼吸器と各種の投入機で意識もなかったが、手術が成功に終わったという医師の言葉に共にいてくださった神様と癒しのためとりなしの祈りして下さったすべての方々に感謝の涙があふれ出た。

「父さん、牧師様からお祈り受けてたいです。今、霊的にとても大変です。倒れそうです。」

手術翌日娘が夜明け5時にスマホから送ってきたメッセージだ。急いでソウルアサン病院教会の 早天礼拝後、牧師さんをお願いしての祈祷を受けた。娘は回復室で深刻な霊的戦いをし、身体的にも苦痛とめまいや吐き気も極度に達していた。当日回復室から家族面会ができる病棟に娘を移した。牧師さんも来て祈って下さった。

妻は手術翌日午前までも意識がなく、人工呼吸器と透析を続けていた。

窓ガラス越しに意識が無い状態でも苦しみ、頭と体を歪める妻の姿を見ながら止めどなく涙を流しながら私はさらに心を込めて祈った。その日、妻の携帯電話で妻が手術前日夜に自らに残した書き込みを偶然に見るようになった。その文を見ると、さらに胸がいっぱいになった。

「怖くて震える心はなく、大胆さをくれてありがとうございます。もうこれ以上人間の力ではなく、神様に委ねます…」

集中的な癒しの祈り後二日目から妻と娘が危急状況を超えた。手術後、二日間目午後から娘は叔母たちの誠意を尽くした看護に心理的にも安定してお粥も食べて短いが、歩行器で歩く練習もするほど回復し始めた。妻はのち、重症患者室から準重症患者室に移して短い時間だが、少しでも顔を合わせて対話もできるようになった。

手術後4日ぶりに肺寄付者の娘と肝臓移植者である母親がいくらか回復され短い時間だったが再会することができた。涙で初めて再会し、お互いに祈り合い別れるときは明るい笑顔で写真撮影までした。手術後5日目から妻パク・クムソン執事と娘ナヘの回復は速やかになった。

しかし、この時から霊的な攻撃が本格化した。特に信頼で一つだった私の家族を霊的に邪魔する悪魔な霊の活動が本格化した。

妻を面会したかたの妻のために言った一言に妻は深刻な傷を受けて急に心の扉を閉ざしてしまった。家族たちにも会いたくないという状況が一瞬に発生した。よく回復しつつあった娘ナヘもその日から急に嘔吐が続いて腰と肩の痛みがひどくなって再びCT検査を受けることになった。

手術の時から一緒にとりなして下さった主サラン教会の牧師様が妻を面会し涙で祈りながら神様にすべてをゆだねた。神様が妻を慰め、心の傷が治療されて霊的に回復されるように、一緒に祈祷するように言われた。

翌日の手術後6日目にも牧師様が朝早く妻を再び訪問して涙で祈祷して下さり多くの方々の霊的な強健に向けた強力な癒



完全な什一献金の正しい理解

以前、韓国教会でささげられている献金の数を調べてみた。すると、90 個もあったので仰天した。しかし、それは、聖徒たちが完全な什一献金をささげないことから始まったのである。聖書に出てくる献金を見ると、什一献金、主日献金、感謝献金、建築献金、宣教献金、例祭献金だけでよかった。しかし、ここでは、完全なる什一献金についてのみ言及したいと思う。

まず、什一献金の種類には大きく三つある。それをすべてささげてこそ、完全なる什一献金となる。一つ目は、レビ部族の生計のための十分の一である。しかしここで終わるのではない。残りの十分の九から、さらにその十分の一をささげるのである。これは例祭のための二つ目の什一献金だ。そして三つ目は、町内に収入がなくて什一献金をささげられない旅人、貧しい人、やもめなどのためにささげる救済のための献金である。これは申命記 14 章 22 ～ 27 節に書かれた三つ目の十分の一である。

献金の主な目的は、感謝である。感謝こそが、聖徒たちの生活の特徴であるからだ。救いと日常生活上に施される神の御恵みに対する感謝のしるしの一つが、すなわち、献金なのである。

しの祈りが家族を霊的に再び一つなるようにしてくださった。当日午後から妻パク クムソン執事の心が霊的に癒され、家族がともにお祈りして、私の家族に向けた癒しの祈祷の力と神様の導きについての会話を家族で交わした。

妻は涙を流しながら、たくさんのかたが癒しのお祈りしてくれたことに必ず感謝の言葉を伝えてほしいと何度も繰り返した。娘ナヘも、この時から、再び回復して嘔吐が止まり、粥も食べ始めた。

霊的に回復されると妻も娘も手術部位の回復が早くなった。一緒にとりなししてくださった多くの方々の心を尽くした癒しの祈りが神様を感動させもっと強い働きとなった。

娘ナヘは、よく回復され、手術後2週間後の5月7日、退院した。妻も日々回復し、5月17日に退院して娘と一緒に治療のため親戚の家で数日間滞在しながら、通院治療を受けた。

その間、私は神様が準備してくださっていた新しい居所を知ることになり引越の準備をした。そして、ついに5月22日、家族が2ヵ月ぶりに共に新しい家に入居し、再び感動の涙を流すことになった。

完全な回復には多くの時間を要したが、この2ヵ月間は毎回神様のお導きと癒し祈りの力を体験して目撃する期間だった。私の家族の信頼を使命で一つとなるよう新たにしてくださり、親戚、家族たちの信仰も強められ、互いに一つとされたハンセ大学教職員と信仰の地域グループ、友人と仲間たちとさらに神様の中で一つになるようにしてくださる神様の善良な意味を目撃し感謝の告白をする。†

什一献金は、信仰の父であるアブラハムが、イエス・キリストの予表であるサレムの王メルキゼデクにささげたことから始まった（創世記 14:20）。ヤコブも、アブラハムにならって什一献金をささげた（創世記 28:22）。しかし、この什一献金制度は、常にきちんと守られたのではない。マラキ書を見ると、完全なる十一献金がきちんとささげられていなかったために、神のものを盗んだと咎めているのである。什一献金は、地の産物と家畜の十分の一をささげることだが、それは神から与えられたすべての恵みに対する感謝の表現のゆえ、イスラエルに臨んだ神の審判も、完全なる什一献金をささげていなかったことに結びつく。驚くことに、什一献金をささげない人はみな、偶像崇拜をしていたということが、重要な核心である。したがって、献金は、金額よりもその精神から見出さなければならない。進んでささげる心と感謝の心をもって喜んでささげなければならない。コリントへと第二手紙 9 章 7 節には「神は喜んで施す人を愛して下さる」とある。

什一献金は、収入の十分の一を神にささげることである。だからといって、残りの十分の九を勝手に使っても良いわけではない。実際、十分の九も神の祝福によるもののゆえに、無駄な使い方をしてはならない。私たちが常に肝に銘じることは、私たちは神からの管理者であるため、十分の九も管理者の精神をもって、正しい使い方をしなければならない。だから、私たちは、節税は良いが、脱税をするのは当然ながら、国家に払うべきものを盗む行為である。教会の什一献金はささげながら、脱税をする行為は偽善だ。したがって、聖徒たちがごまかさずにきちんと税金を払ってこそ、神の栄光になるのである。†



私に下さった
タラントで
仕える俳優に
なりたいです

俳優チョン・ナオンは SBS「第 5 期公開オーディション」でデビューした。ドラマ「告白」「愛の名前で」「コリアゲート」等に出演し、2001 年には女性二人組ロックバンド Button1 集でメインボーカルとして活動した。多数のミュージカル作品で主役に抜擢され、多彩多様な姿で観客達と交流した。最近では、映画「A Stray Goat」では妻役で出演し、2017 年全州国際映画祭招待作品映画「A Living Being」では主役を演じた。俳優、牧師夫人、ラジオパーソナリティ等多才な才能で誠実にこなすチョン・ナオン。純粋な名前で「喜び」という意味のように、いつも喜びを大切にする俳優チョン・ナオンに会いに行った。

彼女は 4 代目の母子家庭に生まれた。曾祖母から続く信仰の遺産を受け継ぎ、幼少期から自然に信仰を持つようになった。

「祖母はいつも祈っていました。中高とミッションスクールでしたが、活動の中心は家、学校、教会でした。」

俳優チョン・ナオンの学生時代の夢は教授だった。勉強好きだった彼女は好奇心旺盛だった。大学も哲学科を専攻した。しかし、神様は予想もしなかった道を備えてくださった。彼女は大学入学後、友達とモデルのアルバイトをした。そしたら、彼女のポートレートがモデルエージェンシーの写真集に載り、それを見た、とあるマネジメント会社からオーディションを受けないかという話が舞い込んだのだ。演技練習をする時間もなくSBS 5期公開オーディションを受けたが、一発で合格し俳優デビューを果たした。

「私は大学生活を十分に経験せず社会人デビューをしました。新しいことへの挑戦が嬉しくてためらいがなかったこともこの仕事を始めるきっかけでした。私が学生時代に常に祈っていたのは、新しい世界、新しい経験、新しい人脈作りについてでした。しかし、主が下さった答えは私の考えとは違う方法でした。同じ歌手でユ・ジュンサンさん、チョン・ソンファンさん、チェ・ソンググさん等が活躍しています。私と親交のあるイ・イルファさんが2期先輩で、ソン・ドンイル先輩が1期先輩です」

芸能活動しながらも歌手になりたい気持ちは大いにあった。高校時代スクールバンドグループサウンズでボーカルをするほど歌唱能力が高かった。「高校時代友達と大舞台にも立ちました。芸能事務所に来てほしいという依頼が多かったけれど、オーディションを受けませんでした。しかし、俳優活動しながら歌手になりたい気持ちが強

くなったので歌手の事務所に移籍し、本格的に準備をし、アルバムを出し歌手活動を始めました。今は亡きシン・ヘ Chol 先輩のプロデュースで実践的なセッションもしました。TV よりはおもに、ラジオ、生放送、舞台での活動が多かったです。コンサートオープニングバンド「硝子の箱」のパク・ヘギョンさん等とも共演しました。」

しかし、俳優チョン・ナオンとしての夢は叶ったが、虚しさだけが残った。「とても長い期間迷いました。タレントとして芸能活動をし、また歌手の夢が叶い、ファーストアルバムも出しましたが、虚しく終わりました。生きる目的は何か、私は誰で、ここはどこののか、いつも自問自答していました。神様の元に行かなくてはならない、その時本当に切に神様に会いたくなりました。」

そんな時、ある同僚を通じて連絡が来た。SBS クリスマス芸能人が一堂に会して聖書勉強をするから一緒にやろうという連絡だった。同じ悩みを持つ芸能人が集まった。職場よりも、教会の共同体に溶け込めないということだった。「私たちを指導する牧師は、集会後、各教会の共同体に散らばらなければならないとおっしゃいました。私は同僚達とそこに行きアイデンティティを探し、神様を体験する時間を持つようになり信仰が育ち始めました。それからこの聖書勉強会の解散後出席していた青年部に入り、弟子訓練を受けながら神様と深く交わり、スランプから抜け出せました。この日が私の信仰生活のターニングポイントとなりました。」

彼女は初めて神様を感じた。「私が一番の場所であるのに…という御声を聞き泣きながら悔い改めた。
「神様は全部下さり、私が今までがむしゃらだったことがとても愚かだということを深く知り悔い改めました。私が主を信頼できなかったことを悟ったのです。何よりも主を信頼し生きていくことを告白しました。」

彼女は7ヶ月間毎週弟子訓練を受けながらすべてを主に委ねた。映画やドラマのオーディションも受けず、だたひたすら祈りと御言葉の勉強に没頭した。生活の心配を主に委ねると、予想だにできなかったことが次々起こった。映画やドラマのオファーが突然来たのだ。週末は、弟子訓練のため撮影が難しいと伝えと制作サイドは日程調整をしてくれた。恩師に対して大切さを悟り、そして祈りの中異言を受けた。神様より前に立たず神様に委ねる時、一切の必要を満たしてくれるのだという体験をした。

深い空虚感から充満した喜びへと変えられ、彼女はミュージカルに挑戦した。
「ミュージカルは演技も歌もできなければならず、負担はなかったけれど、彼女のタラントを発揮できるととても良い機会でした。『ラマンチャの男』を皮切りに、オーディション受けるたび主役に抜擢されました。舞台『ヨドクストーリー』を通し北朝鮮に対する御心を知りました。最近撮影した作品でクリスチャンミュージカル『ガリラヤに行く』が記憶に残り、またドラマ『チンジョンオンマ』で母親に対して理解できるようになりました。」

彼女は CBS ソンソ楽団、極東放送の多様な番組、ワウ CCM 等



左右 CCM 「シネアクション」 録音室にて。
左から映画監督ハ・ミンホ、映画記者チョ・キョンイ、映画俳優チョン・ナオン。
俳優チョン・ナオンは最近、独立映画「出迎え」の主人公を務めた。あとは下半期に封切りを待つのみである。

クリスチャン放送の中でも活動していた。特に CBS ソンソ楽団がきっかけで、今のご主人と出会い素敵な家庭を築くことができた。

「極東放送は8年以上、ワウ CCM でも番組を6年程担当しました。CBS ソンソ楽団はもう10年になります。優秀な牧師達の名講義を聞きながら、為になる御言葉を学んでいます。5年前に CBS ソンソ楽団で企画したイスラエル聖地プログラムに参加しました。とある教会の聖徒と行きましたが、主人は当時教会の引率伝道師でした。旅行中お互いにたくさん話を分かち合いました。美しいガリラヤ湖で彼が私に正式に交際を申し込んで来ました。ソウルに戻り交際を始め、1年後夫婦となりました。いつも私を気遣ってくれる主人に感謝しています。私も、牧師夫人として、内助の功として仕える決心をしました。見本になる家庭を築き、神様に喜ばれる家庭にしたいと思っています。また、真心で多くの人達に感動を与える俳優になれるよう日々お祈りをしています」†

<記事=キム・ソンホン記事、写真=チョ・ソンファン>



救いの道は、いかなる状況や時代においても変わることはない。救われるための道に、簡単で楽な道はなく、まっすぐな直線の道のみが、最も良い道なのである。しかし、現代教会は、聖書の中から最も楽に救われる道を見出しているようだ。そうすることで、より多くの人たちが気軽に救われることを願っているようだ。その動機自体がもはや誤謬であるのに――。そういう理由から現代のトラクトに最も多く用いられる御言葉は、使徒パウロがピリポの看守に語った言葉である。

ピリポの監獄の看守が「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」と訊ねたとき、パウロは「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒 16:30～31）と答えた。「イエスを信じるだけで救われる」というのである。しかも、あなたもあなたの家族までも――。

訊いてもいない家族までもである。この御言葉より気楽な箇所はないだろう。

それならば、なぜパウロは、死ぬ前に最後に会ったエペソ教会の長老たちに、自分の働きについて「ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、強く勧めてきたのである」（使徒 20:21）と述べたのだろうか。ギリシヤのアテネでは、「神は、このような無知の時代を、これまでは見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられる。神は、義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである」（使徒 17:30～31）と『悔い改め』を命じた。聖書もよく知らないし、イエス・キリストについてもよく知らないアテネの人たちに、「神は、このような無知の時代を、これまでは見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられる」と宣言したのである。

聖書全体における救いの条件は二つ、『悔い改め』と『信仰』である。聖書に書かれた御言葉は順序さえも真理であるが、この中で『悔い改め』が先なのである。だから、アテネの人に、神は、「どこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられる」と宣べ伝えたのである。なのに、どうしてピリポの看守には「主イエスを信じなさい」と述べただろうか。その理由は、その前の箇所にある。獄の戸が全部開いているのを見て、看守は自殺しようとした。なので彼は、死を恐れる人ではなかった。そのときパウロは、「自害してはいけない」と大

声で言った。看守は恐れて震えながらパウロとシラスの前にひれ伏した。死のうとしていた彼がなぜ、恐れて震えたのだろうか。——これが『悔い改め』だ。悔い改めとは、死を恐れることではなく、神を恐れることである。だから、この姿を見ていたパウロは、「主イエスを信じなさい」と言ったのである。

『悔い改め』＝神を恐れること

こう説明しても、ピリポの看守の救いだけでなく、より楽な救いの道を見出せる箇所は「右の強盗」の話だ。死刑になるほど、人生を誤って生きてきた右の強盗は、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」（ルカ 23:42）と主に告白した。私たちも主イエスにこういう告白をすれば、右の強盗に語られた御言葉は与えられるかもしれない。——「イエスは言われた、『よく言うておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう』（ルカ 23:43）。しかし、こういう考え、それ自体が惑わしなのである。おそらく主は、右の強盗に言われたようには語ってくださらないはずだ。むしろ、主は、「わたしはあなたがたを全く知らない。思慮の浅い五人の乙女たちにも、わたしは知らないと言ったのだ」と語られるかもしれない。

なぜなら、右の強盗を直ちに（immediately）、一度に（once）なおかつ永遠に（forever）救われた理由は、その告白のすぐ前の箇所にある。手と足に釘打たれたまま十字架に架かっている極度の苦痛の中で、左の強盗がイエスを嘲る時、右の強盗が彼に言った言葉は、主が右の強盗に語られた言葉よりももっと長く記録されている。一つは、その人を叱って言った。「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。お互は自分の

やった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」（ルカ 23:40～41）これが、真実な悔い改めだ。右の強盗に、あなたは「神を恐れないのか」という言葉の意味は、悔い改めとは神を恐れることであるという意味である。「そこでわたしの友であるあなたがたに言うが、からだを殺しても、そのあとでそれ以上なにもできない者どもを恐れるな。恐るべき者がだれであるか、教えてあげよう。殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威のあるかたを恐れなさい。そうだ、あなたがたに言うておくが、そのかたを恐れなさい。」（ルカ 12:4～5）

悔い改めは神を恐れることであり、また、私たちが受けるべき報いに対し、ふさわしい者であると認めることである。ヨブは子どもが皆死んで、事業が倒産したにもかかわらず、彼は次のように告白し罪を犯さなかった。——「そして言った、『わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな。』すべてこの事においてヨブは罪を犯さず、また神に向かって愚かなことを言わなかった」（ヨブ 2:21～22）。ダビデは、自分の息子アブサロムに王座を奪われ追い出されそうになった時、「ゼルヤの子たちよ、あなたがたと、なんのかかわりがあるのか。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ』と言われたからであるならば、だれが、『あなたは どうして こういうことをするのか』と言ってよいであろうか。」ダビデはまたアビシャイと自分のすべての家来とに言った、「わたしの身から出たわが子がわたしの命を求めている。今、このベニヤミンびととしてはなおさらだ。彼を許してのろわせておきなさい。主が彼に命じられたのだ」（Ⅱサムエル 16:10～11）。これが悔い改めである。

私たちの力では解決不可能なかなる絶望的状况においても、悔い改めは神が働かれる回復の始まりにすぎない。神はかたより見ることをなさらない。強盗であれ王であれ、悔い改める者は、誰でも一度に、直ちに、なおかつ永遠に救われるのである。右の強盗の福音も、ピリポの看守の救いのように、『悔い改め』だ。救いにおける、より簡単で楽な信仰の道は、存在しないのである。狭く狭窄のゆえに探し求める者が少なくても、唯一、悔い改めの道があるばかりである。†

発行：純福音東京教会・出版部

【翻 訳】：本橋正輝 兄弟、李カレン 執事、林俊秀 教育生、間杉綾乃 サモ、李 珍 執事、趙芝賢 伝道師、朴宰完 按手執事、金澤由紀子 勸士

【日本語校正】：松谷恵理 執事、吉田綾子 執事、笠原幸子 執事、武石みどり 執事、向川 誉 執事、澤田義則 執事

【印刷・製本】：間杉典生 按手執事

【再 編 集】：金澤由紀子 勸士
